

Title	テキストを語る Textbook Review：テキスト:岩間伸之・原田正樹『地域福祉援助をつかむ』有斐閣、2012年：科目名:ソーシャルワーク原論(II)：担当教員:岩間伸之(生活科学研究科)：特記事項:大阪市立大学教育後援会平成25年度「優秀テキスト賞」受賞
Author	岩間, 伸之
Citation	大阪市立大学大学教育. 12 卷 1 号, p.30-31.
Issue Date	2014-09
ISSN	1349-2152
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学教育研究センター
Description	
DOI	10.24544/ocu.20171218-094

Placed on: Osaka City University

＝ テキストを語る Textbook Review ＝

テキスト：岩間伸之・原田正樹『地域福祉援助をつかむ』有斐閣、2012年

科目名：ソーシャルワーク原論Ⅱ

担当教員：岩間伸之（生活科学研究科）

特記事項：大阪市立大学教育後援会平成25年度「優秀テキスト賞」受賞

1. 社会福祉士の養成と本書のテキストとしての位置づけ

国家資格である「社会福祉士」は、社会福祉領域における相談援助の専門職である。本学生活科学部においても、1988年度から受験資格を取得するための科目を提供してきた。国家試験に合格した卒業生たちは、国家資格を有するソーシャルワーカーとして社会福祉の現場で活躍している。

2007年には、「社会福祉士及び介護福祉士法」の改正に基づき、厚生労働省によって示された「新たな教育カリキュラムの全体像」における科目群の一つに「総合的かつ包括的な相談援助」が位置づけられた。本書は、その中核的な概念となる「個と地域の一体的支援」、つまりは個別支援と地域支援をどのようにつなぐかについて、「地域を基盤としたソーシャルワーク」と「地域福祉の基盤づくり」とを一貫性のあるものとして概念化し、テキストとしてまとめたものである。

本学では、社会福祉士の養成課程に置かれた必修科目である「ソーシャルワーク原論Ⅱ」のテキストとして本書を活用している。

本書は、2部構成になっている。第Ⅰ部では個別支援を地域へと広げていく「地域を基盤としたソーシャルワーク」について述べ（13ユニット）、第Ⅱ部では地域支援を個別の支援へとつなげていく「地域福祉の基盤づくり」（13ユニット）について展開している。イントロダクションのユニットに続いて、計26ユニットから構成されており、大学等の講義でも活用しやすいつくりとなっている。

教材としての本書の特長は、すべてのユニットをと

おして、一つの具体的な「モデル事例」を用いていることにある。長男から虐待を受けている高齢者に対応するソーシャルワーカーの動きを追いながら、やがて本人の生活が落ち着き、平穏な生活を取り戻すまでの過程を記している。同時に、本人が暮らす地域にワーカーが働きかけながら、地域が本人を受け入れ、支え合っていくまでの展開も描いている。こうした具体の事例の描写によって、実践理論の実際を学ぶことができる。

2. 本書の背景 — 今日的な社会的課題と向き合うソーシャルワーカー

昨今の社会福祉の分野では、生活困窮者自立支援法が2015年度に施行されるなど、社会的孤立や社会的排除といったテーマが大きな関心を集めている。自殺、孤立死、ひきこもり、虐待、DV、無職・失業、生活困難な外国籍住民や刑余者、多重債務者、自然災害による被災者など、さまざまな人たちが「生活のしづらさ」に直面し、何らかの援助を必要としている。

こうした背景には、本人の生きる意欲の喪失や他者との関係の断絶、単身世帯の増加や家族機能の脆弱化、さらには地域の人間関係の希薄化など、複雑な要因が幾重にも錯綜している。その背景には、地縁・血縁の瓦解を含めた社会関係の変容が深く影響を及ぼしている。

ソーシャルワークとは、本人の生活の場を舞台として、生活のしづらさを抱えた当事者本人が、生活環境や社会（あるいは社会資源）との関係を結びながら課題の解決やニーズの充足ができるように支えることである。まさに、こうした今日的な社会的課題に対応していくことが求められている。

しかしながら、一方で社会福祉は「制度」によって規定されてきた面が多く、対象者別に縦割りになり、その枠組みのなかで福祉サービスの提供を行ってきたために、新しいニーズに対して迅速に、柔軟に、そして的確に対応できていないという課題が浮き彫りとなっている。国民のニーズや生活課題の多様化によって、現行の福祉制度では対応できなくなっている。

加えて、援助の起点を援助する側（ワーカー側）に置くのではなく、援助される側（クライアント側）に

置くという潮流がますます強くなってきたことも今日的な視点といえる。

ソーシャルワークの基本的な視座として、クライアントが抱える「問題」だけを抽出し、それを援助の対象として焦点化するのではなく、クライアント自身の視点に立脚し、クライアントの生活を全体的にとらえる視座が不可欠であるとされてきた。近年、ますますその必要性が強調されるようになってきている。各専門職が介護、子育て、疾病、所得、家族・近隣関係といった各部面へのアプローチを、それぞれの専門性に依拠して個別に働きかけるのではなく、まずクライアント本人の生活を中心に据え、多様な専門職が連携してトータルに本人にかかわっていくことが求められる。

本書でとりあげた「地域福祉援助」や「地域を基盤としたソーシャルワーク」とは、こうした点を背景として執筆されたものである。

3. 本書の特徴 — 「地域福祉援助」という考え方—

本書のタイトルである「地域福祉援助」とは、「地域を基盤としたソーシャルワーク」と「地域福祉の基盤づくり」を相互に関係のあるものとして一体的にとらえて展開しようとする新しい実践概念である。こうした地域福祉援助が求められる背景には、この両者が理論的にも実践的にも今や切り分けができない状況にあることが関係している。つまり、近年求められるソーシャルワーク実践と地域福祉の推進とは深く重なるものであり、また両者を一体的にとらえることで、個別の事例にも地域福祉の推進にも、より効果的な実践をもたらすことができる。

さらに、本書では、地域福祉援助における両者の関係を、それぞれの機能面から図式化して整理して示した。地域福祉援助は、3つの機能から構成される。「個を地域で支える援助」と「個を支える地域をつくる援助」、そして「地域福祉の基盤づくり」である。地域を基盤としたソーシャルワークは、「個を地域で支える援助」と「個を支える地域をつくる援助」を射程に入れた実践であり、地域福祉の基盤づくりは、「個を支える地域をつくる援助」と「地域福祉の基盤づくり」を包含する概念として位置づけている。

地域を基盤としたソーシャルワークにおいては、日

常生活圏域における「個を地域で支える援助」と「個を支える地域をつくる援助」を同時並行で推進する点に特徴があるが、さらに複数の地域における実践を束ねていくことによって、「地域福祉の基盤づくり」につながることになる。さらに、同時並行で、「地域福祉の基盤づくり」の側から「個を支える地域をつくる援助」を活性化するアプローチも重要となる。そうした蓄積によって、「地域福祉の基盤づくり」の推進が「個を地域で支える援助」という個別支援に寄与することになるという円環的な関係にある。これが螺旋状に底上げされる形で、地域の福祉力が向上していくことになる。

「地域を基盤としたソーシャルワーク」と「地域福祉の基盤づくり」は、焦点を当てるシステムの大きさに違いがあっても、いずれも地域の諸問題の解決に際し、専門職のみならず当事者を含めた地域住民が主体的に関与するという地域福祉の基本的な考え方に基づいている。さらに、その延長線上に、地域住民が主体的に社会に参画していくという成熟した市民社会の構築と共生文化の創造が位置づけられることになる。